

## 深層心理学に基づく臨床心理学からのウェーバー、 ニーチェの心理と精神障害について

山口 豊<sup>\*1</sup>・窪田辰政<sup>\*2</sup>・金木 悟<sup>\*3</sup>

The study of Max Weber's and Friedrich Nietzsche's psychological behavior  
and mental disorder by the point of view from clinical depth psychology

Yutaka YAMAGUCHI, Tatsumasa KUBOTA and Satoru KANEKI

### Abstract

Max Weber and Friedrich Nietzsche were great scholars in the field of sociology and the philosophy. Their study theories are reflected in their mind and behavior as it is. Weber placed reliance in excess in working of consideration, so that he suffered from the neurosis. Nietzsche extremely focused on an unconscious working and he started integrating with unconscious energy and suffered from the mental disease. The process of individuality of the Jungian psychology is integration of consciousness and unconsciousness. However, their psychology and behavior are different from the process of individuality. Their psychology and behavior focused on just one side of human mind. It could be dangerous that the integration of conscious and unconscious is ignored. The Two showed this by their own life. Therefore, the depth psychology requests the growth of the well-balanced mind. For the clinical psychology, it is understand that the well-balanced mind has the significant implication.

### 1. はじめに

19世紀後半から20世紀初頭にかけては、社会的には「近代化」が進行し、心理学的には「心の合理化」が推進されて「無意識」の存在が問題化してきた時代である。その時代の問題を、学問的にも自らの生き方としても真剣に考察してきた社会学と哲学の巨人にマックス・ウェーバー (Max Weber 1864-1920) とフリードリッヒ・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900) の二人がいる。そこで、マックス・ウェーバーとフリードリッヒ・ニーチェの二人の心理行動の傾向と生き方を彼らの哲学や学問論から浮かび上がらせ、その心理行動を続けた二人の巨人が、奇しくも同じように精神的な病に服さざるを得なかったことをユング心理学を主として深層心理学の立場から考察したいと思う。

河合隼雄氏 (1955) は、ユング派の定義を次のように言

っている「自分の無意識から産出されてくる内容を慎重かつ良心的に観察し、それを基にして自分の生き方を決定し、個性化の道を歩もうとする、そしてそのために必要な基本的方法や知識を身につけている者」<sup>1)</sup>。ユング心理学における個性化概念は、臨床や人間存在や人間の生き方など直接かかわってくる場所である。ユング (1933) は次のように言う。“個性化とは、何を意味するのか。個別的存在になることであり、個性というものをわれわれのもっとも内奥の、最後の、何ものにも比肩できない独自性と解する限り、自分自身の本来の自己 (ゼルプスト) になることである。したがって、「個性化」のことを「自己化」とも「自己実現化」とも翻訳できるかもしれない。”<sup>2)</sup> “私は、個性化という表現を、心理的な個体・すなわち他から分離した分割し得ない単位・一つの全体・を作り出す過程という意味で使っている。”<sup>3)</sup> このように定義している。人の自覚されにくい無意識領域に眠っている自己 (セルフ) (筆者注 本来の自分) が意識化されながら自律的に展開

2009年7月29日受付 2009年11月18日受理

\*1 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 (Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba)

\*2 静岡産業大学 経営学部 (Faculty of management, Shizuoka Sangyo University)

\*3 東海大学 海洋学部 (School of marine science and technology, Tokai University)

していく過程である。

自己（セルフ）という概念も言語的定義が難しいが、ユングは、無意識に眠る種子のようなものとして、あるいは、それが完全に展開して全体性を持った姿として、または、心全体の統合の中心機能として、複数に使っている。ユング自伝の語彙からは、ユング（1963）は自己（self, Selbst）を次のように言う。“自己は、中心であるのみならず、意識と無意識の両方を含む全周でもある。それは、自我が意識的な心の中心であるのと同様に、意識と無意識を含む全体性の中心である。”<sup>4)</sup> ユングの個性化過程は、自己（セルフ）を実現していくことであるといえる。そして自己は、意識と無意識の両方を含んでいる。「自我」と「自己」の関係は、意識と無意識が互いに補い合って一個の全体（セルフ）になるので、「自己」セルフは、意識界の中心でしかない「自我」と比べれば、より上位の存在といえるであろう<sup>5)</sup>。

このようなユング心理学の立場からウェーバーとニーチェの学問論や生き方を見みると個性化過程とはやや異なった彼らの心理行動が浮かんでくる。

## 2. ウェーバー、近代化精神への葛藤

ウェーバーの近代化・合理化論の評価は、研究者によって、二つに分かれてきた。ウェーバーを近代化論者として研究する立場は多い<sup>6)</sup>。しかし、一方、彼を反近代的なヨーロッパ精神を相対化する立場にいることを見出す研究も多い。その分裂した研究者像がまた、彼自身の生の緊張をあらわすものであり、近代という時代の宿命から逃れることなく戦った彼の姿でもあった。

ウェーバー（1919）は言う。“もしこれらの学問が、なにかこの点で役に立つとすれば、それは、むしろ、この世界の意味というようなものの存在に対する信仰を根本から除き去ることである。”<sup>7)</sup> “ある研究の成果が重要であるかどうかは、学問上の手段によっては論証し得ないからである。それはただ、人々が各自その生活上の究極の立場からその研究の成果がもつ究極の意味を拒否するか、あるいは承認するかによって解釈されうるだけである。”<sup>8)</sup> このように言い、学問と自分の個人的な価値判断を完全に分けている。このような厳しい、ウェーバーの態度は、プロテスタンティズムの精神そのものと言える。

ウェーバーは、表向き西洋文化の合理化過程を人類の普遍性という視点でとらえていた。“近代ヨーロッパ文化に生を受けたものが、普遍史的な諸問題を取り扱おうとする場合、彼は必然的に・・・いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために他ならぬ西洋という地盤においてまた、そこにおいてのみ普遍的な意義と妥当性を持つような発展傾向を取る・・・文化的諸現象が姿を現すことになったのかと、今日、我々が、「普遍妥当的」だと認めるような発展段階にまで到達している「科学」なるものは、西洋

だけにしか存在しない”<sup>9)</sup> このように、ウェーバーは、西洋の近代化を肯定する立場をとる。また、ウェーバーの伝記（1926）には次のような言葉がある。<sup>10)</sup> “「詩人シュテファン・ゲオルゲ」との対話である。ゲオルゲ：「すべての人間が自分の審判者でありうると、あなたは思いですか」 ウェーバー：「すべてがそうでありうるとは思いませんが、そうなるように、彼らを成熟させるということが究極の目標だと思います。」 ゲオルゲ：「では、あなたは、ご自分の審判者でありたいと思いますか」 ウェーバー：「ええ、私たちは、そう思っています。」」この会話の意味するものは、現代が合理的で科学的な時代であり人間の本質が破壊されるという意味喪失した文化の時代であるという共通認識の下で、ゲオルゲはその解決策を「詩」という貴族主義的なロマンティシズムに求め、神秘主義的態度によって再び人間性を回復するという反近代的な心理構造を示しているのに対し、ウェーバーの態度はあくまで、カント哲学の定言命法の立場と同じように、近代が最も重視する「理性」によってどこまでも人間を啓蒙し、人格を意識的に完成させる近代的な心理構造を示している。このようにウェーバーはあくまで本人の意識レベルでは、「近代化」を肯定する。

しかし、ウェーバー（1905）の次のような言葉は何を意味するであろうか。“近代資本主義のいやそのみでなく近代文化の本質的構成要素の一つというべき天職理念を土台とした合理的生活態度は、キリスト教的禁欲精神から生まれたのだった・・・近代の職業労働が禁欲的性格を帯びているという考えは、決して新しいものではない。専門の仕事への専念とそれに伴うファウスト的な人間の全面性からの断念は、現今の世界では、すべて価値ある行為・・・こうした禁欲的基調、ゲーテもまた、その人生知の高みから「ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代」とファウストの生涯の終幕によって我々に教えようとしたのだった・・・将来この鉄の檻に住む者はだれなのか。そしてこの発展が終わるときまったく新しい預言者たちがあらわれるのか、あるいは、かつての思想や理想の地から強い復活がおこるのか、まだ誰にもわからない・・・こうした文化発展の最後に現れる末人たちにとっては、次の言葉が真理となるのではないだろうか。精神のない専門人、心情のない享楽人。この無のものは人間性のかつて達したことのない段階まで、すでに登りつめたと、自惚れるだろう”<sup>11)</sup>。このウェーバーの言葉から近代化への楽観的立場は読み取れるだろうか。ウェーバーの視点は、近代化・合理化に全面的に賛成はしていないのである。

そして、『宗教社会学論集』においては、近代化を象徴的に現す「資本主義」を「運命的な力」<sup>12)</sup>と把握している。これは、資本主義を支えている合理化精神を肯定的に把握しているというより、否定性を帯びたあきらめの境地を語っている。

また、『職業としての学問』の中でウェーバー（1919）

は、次のようにも言う“もし、これらの学問が何かの点で役立つとすれば、それはむしろこの「世界の意味」というようなものの存在に対する信仰を根本から除き去ることである”という<sup>13)</sup>。ここには、ニーチェのニヒリズムの問題意識と同じものが展開されている。

近代化による脱呪術化は、学問の主知主義によって進められるとウェーバー（1919）はとらえている。“各人は、そのいずれかが彼にとっての神であり、そのいずれかが彼にとっての悪魔であるかを決しなければならない”<sup>14)</sup>“かつての多くの神々は、その魔力を失って非人格的な力となりながら、しかも、その墓から立ち現われて我々の生活への支配をもとめてふたたび永遠の争いを始めている。ところが現代の人々にとってとくに現代のヤングジェネレーションにとって最も困難なのは、この日常茶飯事に耐えることである。かの「体験」を求める努力もこの意味の弱さから、というのは弱さとは、結局時代の宿命（筆者注 合理化、脱呪術化、主知主義化からの意味喪失）をまともにみることのできないことだからである”<sup>15)</sup>この、ウェーバーの発言に、本人の悲痛さや葛藤を感じるのは、筆者だけであろうか。

近代化・合理化によって理性以外の感情や身体などを含めた「全体としての人間」が切り捨てられる時代の運命に対してニーチェと一緒に内面的には、悲痛な叫びをあげても学問に奉ずるものとしての立場を決してくずさず、ピューリタンの緊張感を持って、この無意味化に耐えるという立場が、近代化・合理化に対するウェーバーの誠実な対応であったと筆者は考える。ウェーバーは、禁欲的プロテスタンティズムが引き起こしたこのような影響と未来の在り方に対し、バラ色の未来を持って期待するのではなく、悲痛な叫びでひたすら耐えるという、ウェーバーの社会学の学問概念にある「英雄倫理」を自らに課しているように生きている。つまり、ウェーバーは、表向き（意識レベルでは）近代化・合理化に対して（時代の運命として、西洋人として）肯定してはいるが、しかし、深層レベルでは、上記のようにウェーバーは、近代化・合理化に対して葛藤しているのである。そういう意味で、ウェーバーは、深層心理学的立場ほどではないが、西洋近代化を推進した合理化に対して葛藤し、西洋の合理化を支える意識偏重の文化を相対化し始めた位置にいたということが言える。

ウェーバーのこの激しい葛藤は、臨床心理的にはどう考えられるであろうか。筆者は、ウェーバーの生を限りなく尊敬するが、あくまで、近代化・合理化の引き起こす意味の喪失、人間の全体性の放棄などの近代特有の問題に対するウェーバーの態度は、深層心理学的には、意識レベルでの対処にすぎないと言わざるを得ない。実際、ウェーバーの緊張的生は神経症によって振り回されていくことになるのだ。

### 3. ウェーバーの神経症

ウェーバーには、妻のマリアンネが描いた有名な伝記があるが、そこに描かれているウェーバーの生は、彼の学問と同じように、緊張に満ち満ちている。つまり、禁欲的エートス、ヨーロッパ近代化・合理化を推進したあのプロテスタンティズム特有の精神に満ちあふれている。ウェーバーの家系にも多くの精神疾患の患者がいるということ、妻のマリアンネも老いてから精神疾患を患っていることを考えて、彼の家系や環境は、あまりに理性を過信して自分の生をコントロールするという、深層心理学でいえば、無意識の働きを「抑圧」する英雄的な生き方をしていると言える。次の、マリアンネ（1926）の言葉は、そのことを物語っている。“意識されぬ生命の深部から何か恐るべきものが彼にむかって爪を伸ばしてきた。”<sup>16)</sup>1898年の春以降こうしてウェーバーは、重い神経症に罹り、以後、回復することができず、ついに、ハイデルベルグ大学教授の職を退かねばならなくなる。その後、何度か激しい神経症の症状に襲われ、1900年からハイデルベルグを離れコルシカで過ごし、ローマに行き、南イタリアを周遊し、フィレンツェをおとずれる。1年10カ月に及ぶ旅行が神経症にいい影響を与えた。それは、単に暖かいという地理的な理由ではなく、ドイツの厳しいプロテスタント的雰囲気から楽天的な明るいラテン的気質の南欧に行くということであり、南欧のカトリック世界は、ウェーバーの精神構造であるプロテスタンティズムを距離を持って相対化するには、適切な場所でもあった。そこで、非常に厳しいプロテスタンティズムで自分を拘束していた精神（フロイトの言葉では、超自我による抑圧）を和らげていく。ボーデン湖畔のサナトリウムで療養していた頃、妻にあてて次のような手紙を送った。“このような病気はそれなりに好ましいところを大いに持っている。一たとえば、ぼくに対しては、お母さんがいつもぼくにはそれがわからないと言って少々残念がっていた人生の純粋に人間的な面を、ぼくが今まで知らなかった程度にまで打ち開いてくれた。・・・僕の病的な素質は、今までの歳月の間、何から自分を守るものかはわからなかったが、何かの護符にしがみつこうように学問的な仕事に癡癡的にしがみつこうということに現れていた。・・・わかっているのはただ、病気であれ健康であれ僕はもうあんな風には、ならないだろうということだ。仕事の重荷のもとに打ちひしがれているような気持ちがしないとやりきれないという欲求は、なくなってしまった。ぼくは何よりもまず、ぼくの＜赤ちゃん＞（妻、マリアンネの愛称）と一緒に人間的な生活を十分に味わい、そして自分がそれを味わっているのを僕として、可能なかぎり幸福な気持ちで見たい。 ”<sup>17)</sup>「仕事の重荷のもとに」というのは、プロテスタントの神から与えられた天職（ベルーフ）としてひたすら禁欲的に遂行しようとする典型的なプロテスタントの職業

人の心理行動様式で、どうやらそのために病になったことを、ウェーバーは自覚する。しかも、この言から、ウェーバー自身この病にある意味を見出し、自分の人生の心理的変容が始まったことを読み取ることもできる。深層心理学的に興味深い言葉である。

しかし、病気が始まってすぐの頃、母親ヘレーネが何もできないマックスに向かって苛立ち“彼女自身の雄々しい絶えず、容赦なく自分自身を押し殺そうとして気を張りつめている意志は、一切の精神的肉体的緊張に打ち勝ってきた。自分の息子にもそれができないのか<sup>18)</sup>”と考えていらだっている。プロテスタント的な役割義務の観念を堅持することで、人生を生き抜いてきた母親の強靱な精神には、息子の精神の病気を受け入れて癒すことができなかった。息子を意志薄弱者として叱咤するそぶりをあらわしている。この母親像からもウェーバー家の精神的緊張、合理的精神の重視を見出すことができる。母親は、典型的な禁欲的プロテスタントの生き方であると筆者は感じる。このような身近なプロテスタンティズムの雰囲気、彼のプロテスタンティズムの精神構造の分析となり名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の誕生につながったのであろう。

このウェーバーへの精神的病については、西洋の近代化・合理化が、人間の豊かな「生」への対決であるというウェーバー近代化論の学問的見解が、そのままウェーバー自身の生にパラレルに生じてきたと考えることはできないだろうか。奇しくもこの時期は、深層心理学の開拓者フロイトの活躍する時期であるということもあって興味は尽きない。

ウェーバーは神経症になり、生（レーベン）の奥底に潜むコントロールできない無意識の力に直面したとき自分の過去の生を根本から疑ってみるようになった。そのことでウェーバーは、禁欲的プロテスタンティズムの限界を自ら体験し、無意識探求の一步手前までやってくる。が、ウェーバーは、そこから振り返って、戻ってしまい、フロイト理論とは、一線を画す。意識レベルの限界を認識しながらも、あえて意識レベルにとどまっていることがかれの緊張的生そのものであったといえる。

ウェーバーの近代化・合理化論は、西洋における深層心理学誕生の精神的背景を探求するには、心理学的に貴重な学問分析を提示してくれる。だが、皮肉にもそのプロテスタンティズムの生を自らに課して「英雄倫理」で生きようとしたウェーバーは、自らが神経症になり、生涯の大部分を心の病への治療に当てなければならなかった。つまり、過剰な意識レベルの理性による無意識抑圧の自己コントロールは、彼の生を破たんさせてしまったのである。ウェーバーの神経症は、深層心理学の臨床事例として重要な例である。

#### 4. 深層心理を垣間見たニーチェ

次に、フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844–1900）を取り上げる。ウェーバーもそうだが、フロイトもユングも大変ニーチェを高く評価している。ニーチェの哲学は、ウェーバーが、深層心理の見解までもう一步のところまで来て、葛藤しているのに対し、事実上深層心理学に限りなく接近してくるからである。

フロイト（1925）は次のように言う。“ニーチェについていえば、彼の予見と洞察とは、精神分析が骨を折って得た成果と驚くほどよく合致する人であるが、いわばそれだからこそ、それまで、長い間避けていたのだった。”<sup>19)</sup> また、フロイトの心の3つの領域を表す、「超自我」、「自我」、「エス」という言葉があるが、エスは無意識領域を表すが、実はニーチェの用語にならってフロイト（1917）が用いたのである<sup>20)</sup>。

ユング（1916）も、次のように言う。“フロイトやアーダーに較べて私が大いに得をしていた点は、私が神経症心理学とその一面性の内部に育った人間ではなく、ニーチェによって近代の心理学を受け入れる準備をされて精神病学からこの途に入り、・・・”<sup>21)</sup>と言う。またユング（1963）は、自伝の中で、無意識のイメージの基礎として、次のように言う。“哲学的錬金術の初めやグノーシスからニーチェのツァラトゥストラに至る黄金の鎖の一つの環である<sup>22)</sup>。”このように、フロイトやユングは、ニーチェの哲学の中に、自分たちが探求した無意識世界の働きを見ているのである。

もともとキリスト教は、人間の深層心理を直視しない傾向がある。それは、ユダヤ教に始まる神と人間の二元論があるからである。したがって、人間の衝動性を含めて全体的に考察するという心理学が西洋では、ニーチェまでは誕生しないのである。そこで、ニーチェは自分の前には、心理学はなかったといい、自分を「心理学者」と言うのである。ニーチェ以前の心理学を生まない西洋の人間観は、キリスト教がもたらしたとニーチェは考えている。キリスト教は、人間をありのままに見る目をくらましてきたと捉える。そして、キリスト教が重視する「愛の教え」や道徳の表層的な解釈の嘘を見破り、分析し批判している。

絶対神を想定し、人間は被造物で、その神化は、神を冒すものであるというルターやカルヴァンの教義によれば、当然人間の心も神に由来するものとなり、全能なるそして完全に善なる神が創造した人間の心の中に不浄のものや、不道徳的なものがあってはならないということになる。もし、それを見出す作業をすれば、フロイトのように批判にさらされるであろう。理性のコントロールのきかない心の世界は闇であり、神とは関係がないのである。したがって、人間の心を探求する場合は、常に神の存在から解

明しなければならないことになり、当然、公認の教義（議論は許されない）から出発せざるを得ない。心理学は、神学によって前提づけられる。それでは、前提のついた「心の分析」となってしまう人間の心をそれ自体として分析する心理学は生まれない。したがって、心理の構造や無意識の自立的な働き、無意識界の衝動的な面、さらにはその無意識界の暗黒面を突き抜けて到達する自己（セルフ、仏教では佛性、道教では真人、錬金術の両性具有人など）を見出す作業は永遠に失われてしまうだろう。

そういう意味でフロイトがユダヤ人でありながら、信仰をもたないユダヤ人であったという事実は、重要なことであった。フロイトは、親交のあった牧師プフィスターに向かっても、精神分析学を創ったのが、なぜ信仰厚い人たちではなく無信仰のユダヤ人でなければならなかったのでしょうかと問うている<sup>23)</sup>。

この、人間の深層心理をありのままに見ようとししない源泉をニーチェはキリスト教に見たのである。したがって、ニーチェは、キリスト教の教義や教条主義（ドグマティズム）に対して著しい批判を加え、キリスト教道徳を深層的に分析しながら、ルサンチマンの理論として徹底して嫌悪した。人間心理の前提を根本的に断ち切るためにニーチェは、「神は死んだ」と宣言したのである。ここで、初めて西洋は人間の心があるがままに分析するという立場を確立し、フロイトもユングも自分たちとニーチェの接近性を述べるのである。そういう意味で、ニーチェは、心理学者ではないかもしれないが、深層心理学と同じ地平にいるのである。

## 5. ニーチェの深層心理的キリスト教批判

F・ニーチェは、人間の心の説明原理として、西洋キリスト教社会がどうしても前提せざるを得ない「神」を捨てて、人間の内面にある世界を善惡にとらわれず（ニーチェには『善惡の彼岸』という書がある）あるがままに分析していく。ウェーバー（1919）は、『職業としての学問』の中で次のように言う。“あるものは、善ではないが美しくありうるというだけでなく、むしろそれが善でないというまさにその点で美しくありうる。このことは、ニーチェ以来知られており、・・・あるものは美しくもなく神聖でもなく、また善でもない代わりに真ではありうるということ、いな、それが真でありうるのは、むしろそれが美しくても神聖でもまた、善でもないからこそであるということ、—これは、今日むしろ常識に属する。”<sup>24)</sup> この言葉はまるで、心の中を深くのぞいた深層心理学者の言う人間の無意識界の「衝動性」を言っているようである。前述したように、ウェーバーは近代化によって合理化された人間は、ますます生の意味を喪失すると言い、ウェーバーは近代を「神々の闘争」の時代という。キリスト教の価値観が、学問によって相対化されたことを言っている。ウェー

バーは、前述と重なるが、そのような時代に対して男らしく耐えるという「英雄倫理」を追求する。ここが、ニーチェやフロイト、ユングと距離のあるところである。あくまで近代化・合理化を推進した理性的な意識世界にとどまることを要求するのである。

しかし、ニーチェは違う。キリスト教やその道徳によって、おおわれた人間の心の深い層の真実の姿をむき出しにしてしまうのである。これは、神という前提を崩せないキリスト教文化圏では大変な作業だったろう。あたかも、ユングがカトリックのミサや錬金術の中に異教的な部分を見出し、分析心理学を確立していく中で、キリスト教的立場からの批判や精神病に近い状態になるほど無意識との対決をしなければならないほどの過酷さを生きねばならなかった生と類似する。ニーチェによれば、神は死んで「ニヒリズム」（虚無主義）が到来すると言う。三島憲一氏（1987）<sup>25)</sup>によると、ニーチェはこの「ニヒリズム」を「従来の最高の価値がその価値を失った」状態だと言う。従って、この「ニヒリズム」に対しニーチェは、悲観的ではない。なぜなら、ニーチェによれば、もともと、西洋の道徳は、キリスト教によってありもしない空虚な価値観を「ルサンチマン」理論としてねつ造されてきたわけだからである。“ある特定の世界解釈、つまりキリスト教の教義や道徳の中にニヒリズムが潜んでいたのである。つまり、ヨーロッパの歴史は元来が、ニーチェによれば虚構の上に打ち立てられていたことになろう。つまり、最初の犠牲の日から人間が概念と理想主義によって自然を支配し、自己自身の自然な欲求を抑圧した最初の日からひそかにニヒリズムにとらえこまれていたのである。”<sup>26)</sup>、そこで、ニーチェは、キリスト教を一種の「心理療法」のようなものであると言う。しかし、それは本当の意味の治療ではなくて、むしろ不快を緩和し麻痺させる一種の慰藉方法にすぎず、療法としては最悪のものだと論じている<sup>27)</sup>。このキリスト教への見方の是非は述べる。重要なことは、西洋において、ニーチェによって、人間の外側に定立するキリスト教の絶対神を徹底して排除し、人間の心の動きをそれ自体として観察しうる視点が現われたということである。そこから、フロイトの無意識界のリビドーの探求やユング心理学の個性化過程を説く深層心理学の誕生に限りなく接近してくるのである。

このように、ニーチェはキリスト教に対しアンチ・クリストの立場をはっきりさせているが、彼は決して人間の宗教性を否定しているのでは全くない。彼は、イエス・キリストに対しては肯定的である。ただ、一人のキリスト者という。また、異教の古代ギリシアの神々への造詣も深い、特にデュオニソスという神に自己を一体化したり、有名なツアラトゥストラ（ゾロアスター）をモデルに超人思想を展開する。また、ショーペンハウアーの影響もあって、東洋思想への理解は深く、ニーチェ思想は、仏教的なところも多い。特に、『曙光』において仏教を高く評価する。こ

の辺は、ユングに通じるものがある。

一方、ニーチェは、キリスト教道徳については、「ルサンチマン」理論として激しい批判を繰り返す。このルサンチマン理論は、人類愛を説く屈折した人間心理への深い洞察がなされた理論である。ニーチェに言わせれば、もともと人類において行為や判断の基準としたものは、我々が通常道徳と呼んでいるようなものではなく、「美的な価値観」であったと言う。しかし、キリスト教精神によって人間世界には、「善」と「悪」という対立が侵入することになる。このような価値のすり替えをし、神の国や道徳を説教することをニーチェは、「ルサンチマン」と呼んだ。「逆恨み」、「怨恨」とでもいいうるものである。自分より強い人間、優秀な人間への反感感情を隠すために、フロイト的には抑圧するために、「正義、神、愛」などを作り上げ、自分を道徳的に正しい人間と正当化し、強者に対して持っている心の奥のひそかな復讐心を塗布していくようになると言う。

心理学的には次のようであろう。人は、自分をいじめたり、迫害したりするものや自分の能力をはるかに超える強者に対し、嫉妬や憎しみの感情を持つが、それが攻撃心として他者に立ち向かうことができない場合、つまり、心の中で他者に勝ち目がないと知るや、例えば、いじめをするものに対しては、『「いじめ」は道徳的に悪いことですよと言ひ、あなたは、悪いことをしているのですよ。しかし、自分はその悪を犯さないで、かえってそれを許し（聖書：汝の敵を愛せ、右のほほを打たれたら左のほほも向けよ）愛の論理であなたを許し愛しますよと、攻撃することは道徳的には、正義ではないので、自分はしません。』というような心理行動をとっていくということである。愛や正義の名のもとに他者への憎悪を自分の内部で抑圧しながら、自分を他者よりも道徳的に高い地位を占めることで、その恨みに報いているのだとニーチェは、喝破するのである。だから、キリスト教道徳は、ルサンチマン道徳であるという。三島氏（1987）によれば『ツアラトゥストラ』でニーチェは、「そして犠牲と奉仕と愛のまなざしのあるところ、そこにもまた支配者になろうとする意思がある。つまり、その時、弱者は隠れた道を通して強者の城内へ忍び込み、さらには、主人の心臓の中にまでもぐりこみ、力を盗むのである。』と言う。更に、このようなキリスト教は、平等道徳という奴隷道徳をローマ帝国解体期以降、ヨーロッパに席卷させるようにしたとニーチェはとらえていると言う<sup>28)</sup>。更に、ニーチェは言う。「愛」とか自己肯定の抑制とか、忍従、忍耐、援助とか・・・を説く教えや宗教は、そうした階層の内部では、最高の価値をもちうるが、それは支配者の目から見てもさうである。なぜなら、そうした教えや宗教は、できそこないの者どもには、あまりにも自然な感情であるところの競争心やルサンチマンや嫉妬の感情を抑制し、謙虚と服従の理想を借りて奴隷であること、支配されること、貧困であること、病気であること、

下位に甘んずることを彼ら自身のために神聖化するからである。”<sup>29)</sup> このように、ニーチェは、ほとんど深層心理学者が分析するように人間の心理を暴いてしまうのである。道徳の偽善をはいでしまったと言ってもいい。

実際、キリスト教の歴史をみると、ニーチェの分析が正しいことがわかる。キリスト教のもとになっている古代ユダヤ教を信仰する民は、ひたすら全能の神を信じながらも、他の周辺の巨大民族に迫害され続けてきた。エジプトにバビロンにローマ帝国にそのつど強者に迫害されてきた。心理的に安定するためには、自分たちの側にこそ正義はあるのだという意識がないととてもやりきれなくなるだろう。また、キリスト教になってからも、古代ローマ帝国の迫害はすさまじいものだった。ネロ帝をキリスト教徒は永遠に許さないだろう。

キリスト教道徳に影響を受けた、愛や正義や善や許しのような心理行動に至上の価値を見出すキリスト教の人間観は、ニーチェによってその姿を暴かれ、フロイトによって破綻したといえるかもしれない。そこで、兩人ともキリスト教からは敵視されることが多い。もう少し、このルサンチマンの心理分析を試みる。ニーチェは、『道徳の系譜』『善悪の彼岸』で、キリスト教道徳を弱者のルサンチマンとして説明する。ルサンチマンの心理は、虐げられた人が復讐したくても相手が強いとか、社会的支配者で行動できないために、弱者も強者と同じように生への意志や力への意志をもっているが、それを外に放出できないで自分自身に内向させる。いわば、攻撃性を内向させて自虐を行うと同時に心理的に自分を責め立てて、良心のやましきや罪を自分に課して悪いことなのだと無理に正義を自分に課そうとする。自分の心の中にある「力」や「強さ」や「名誉」や「富」を求める欲心を「罪深いもの」とみなし、否定することで強者を否定し、自分をいつの間にか上位に置き、強者を心理的に支配してしまうのである。こうして、復讐心を満足させるのである。見事な深層心理分析である。フロイトがニーチェに精神分析を重ねるのも納得がいく。したがって、このようなニーチェの哲学や心理分析は、フロイトの「無意識」理解とほぼ同じところまで来ているといえるだろう。

このように、ニーチェによって人間の深層心理を暴かれると、確かに西洋人は、「ニヒリズム」（虚無主義）に陥るかもしれない。そこで、再び、キルケゴールのように神への信仰に戻ることによって、あるいは、ヘーゲルのように「神」を「理性」に取り換えた壮大な哲学体系を樹立することによって、あるいは、マルクスのようにユートピアを求めることによって心理的安定を求めるかもしれない。しかし、ニーチェは、「何がしかの神」を立てることで、「ニヒリズム」を克服しようとしなかった。深層心理学の先駆けと言っていいニーチェは、この人間の外側に建てた絶対なる神による信仰と道徳こそが、つまりキリスト教そのものが、無意味化をもたらしたと分析する、したがって神に

帰るのではなく、人間の内面に向かうことこそ（それ故、自らを心理学者といい、自分の哲学を心理学と呼んでいるのである）ニヒリズムを乗り越えることができるとしたのである。

ニーチェは、人間心理を徹底的に見つめ、その中に救済を求めた。それが、人間自身の心の中にある力（神にも昇ろうとする力）であった。彼の言う「力への意志」である。それを象徴するのが「ツアラトゥストラ」であり、「ディオニュソス神」だったのである。「ツアラトゥストラ」も「ディオニュソス神」も生のエネルギーの根源を象徴する神である。フロイトにならえば、リビドーと言ってもいいだろう。ニーチェは、人間の内面に向かい、その中にヨーロッパ人の心理メカニズムの異常さを指摘し、意味喪失時代の人間にキリスト教の神に代わって、人間内面にある爆発的エネルギーと一体化することを訴え、ヨーロッパに新しい福音と警鐘を鳴らしていたのである。

## 6. ニーチェの精神障害

しかし、ニーチェは、晩年精神に異常をきたしてしまった。このことは、臨床的な立場から考えると重要なことである。ニーチェの精神障害は、神経症でなく完全な精神病であった。ウェーバーは、自我をどこまでも信頼する男性的精神性を強化することで神経症になった。意識ではなく無意識界の存在とその力を知っていたニーチェは、前述したように無意識界の善悪では測れないとてつもないエネルギーの存在を見て、魅せられたのだった。このエネルギー、「力への意志」こそ、ニヒリズムを乗り越え、生命力豊かに生きる原動力であると考えた。そこで、古代ギリシアの光のアポロン神とは対照的な酒宴の神、混沌とした力を持つディオニュソス神に、また、ペルシアの神ツアラトゥストラにそれを見ていた。

臨床的に考えてみると、ニーチェは、これらの神々に表わされる無意識界の「集合的無意識」内の「元型」のエネルギーと一体化することで、過剰に意識レベルを軽視あるいは無視あるいは反逆を試みたのであった。この「集合的無意識」内のエネルギーの魅力にのみ自我が捕らえられてしまったのである。臨床心理学的には、混沌としたエネルギーをもつ無意識界の「集合的無意識」や「元型」の世界に自我の防衛を持たずに無防備で入ってしまったようなものだろう。無意識界が、非常に魅力に富んだ世界を垣間見せるとしても、安易に入ってしまうことは危険であり、無意識界の力は自我を簡単にも覆ってしまうことは、臨床家なら知っているのだから、安易に接近はしない。ユング派でありながら、自我を強化することの大切さを河合準雄氏は著書で何度も指摘するように。ユングも「自伝」にもあるように、精神障害の一手手前までいってしまうが、しかし、ユングは、現実世界での意識的な彼の仕事が、彼をそこから離さなかったといっている。フロイトは、神経症の克服

には、激しいまでの無意識のエネルギーを自我に統合し、自我を強化する必要性を説いている。ユングは、無意識界に、混沌としたエネルギーだけでなくマンドラや元型や「セルフ」の存在まで見ていく。そうすることで、（それは大変な困難をもちろん伴うが）、その無意識のエネルギーに翻弄され、精神が乗っ取られ、神経症や精神病のようになってしまうことを防ぎ心理的な健康さが保たれ、心の成長がもたらされる。

実際、ニーチェは、重度の精神障害を患ってしまった。それ以後、友人に意味不明の手紙を出したり、手紙の署名にディオニュソスと署名している。ニーチェは、深層心理学誕生に大きな役割を演じた稀有な人物だが、彼の対処の仕方は臨床的には、ウェーバー同様、問題があると言わざるを得ない。ユングの生涯と心理学を紹介したA・ステューヴンズ（Anthony Stevens）（1990）は、その著書<sup>30）</sup>の中で次のように言う。“ユングが自分自身の個性化について述べているところで、この途は、危険をはらんでいると言え、同じ道をニーチェは歩もうとして深刻な悲哀に遭遇した”としている。また、ユング（1963）自身、このニーチェの病気を次のように言っている。“無意識の内容は私の正気を失わすかも知れなかった。しかし、私の家族と私の知っていること、つまり私は、スイスの大学からもらった医師の資格をもっていること、私は、患者を助けねばならないこと、妻と5人の子供を持っていること、キュスナハットのゼーシュトラッセ228番地に住んでいることなどは、私にいろいろ要求をしてくる現実であり、私が実際に存在していること、ニーチェのように精神の風に、まにまに舞っている白紙ではないことを私に立証するのだった。ニーチェは、彼の思想の内的世界—彼がそれを所有しているよりも時に、それが彼を所有している—以上の何物ももたなかったのだ。彼は根こそぎにされ、中に迷っていた。したがって誇張や非現実性に屈服させられたのだ。私にとっては、そのような非現実性は恐怖そのものであった。”<sup>31）</sup> “ニーチェは、きわめて自覚的にそしてまたはっきりと感じながら、ふるい価値を壊しましたが、それにもかかわらず、一種の第二人格あるいは、もう一人の自我としてのツアラトゥストラをよみがえらせることによって自分を支えようという欲求を覚えていました。彼は、偉大な悲劇「ツアラトゥストラはかく語りき」において、しばしばこれに同一化しています。ニーチェは無神論者ではありませんでしたが、彼の神は死んでいたのです。その結果、ニーチェ自身が引き裂かれ、もう一人の自分を「ツアラトゥストラ」あるいは、別のときには、「ディオニュソス」と呼ばざるを得ないと感じました。彼は、自分の手紙に「ザグレウス」という署名をしています。・・・これはディオニュソスのことです。『ツアラトゥストラ』の悲劇は、自分の神が死んだために、ニーチェ自身が、神になったことにあります。・・・彼はあまりに積極的な人間であったために、消極的信条に満足することがで

きなかったのです。このような人にとって、神は死んでいるという陳述を行うのは危険であるようです。彼はただちに、「思い上がり（インフレーション）」の餌食になります。…巨大なエネルギーであるため、そこから生じるのは、人格の分離という形で同様に重要な心理学的障害です。分裂から二重人格あるいは、多重人格が生じる可能性もあります。まるで、単一の人間では、エネルギーの全部を担うことができないかのようです。その結果それまでの機能上の単位であった人格の諸部分がばらばらになり・・・<sup>32)</sup> このようにユングはニーチェを診断している。更に、ユング（1944）は、ニーチェがこの動物的な原初の心を持つディオニュソスが自分を襲ったことを知っていたとも言う<sup>33)</sup>。

## 7. ウェーバー・ニーチェの精神的病への臨床的解釈

上記のニーチェとウェーバーの精神の病を見ると、臨床的に重要な人間観が見えてくる。前述したようにウェーバーの生涯には、あまりに多くの意識レベルの過重な負担がかかっているのを彼の学問と生涯から読み取れる。ウェーバーはまさに、フロイトが言う防衛機制の抑圧によって、抑え続けてきた無意識界の衝動に自我が振り回されてしまったといえる。そして、ユングの「個性化過程」や「集合的無意識」や「元型」概念などにある無意識界の力を見ることをしないため、全体性の実現には程遠く、狭い意識レベルでの対処が彼の心を破たんさせたと考えられるだろう。

一方、ニーチェは、反対に無意識界の過重な期待によって、「集合的無意識」や「元型」との一体化を進めたために意識を軽視して一人の人間としての統合ができなくなって多重人格的になり、方向性を失い無意識界のエネルギーに翻弄されてそのエネルギーに方向性を与えることができなくなって人格が完全崩壊してしまったのである。フロイトの防衛機制はある意味適応機制でもあるにもかかわらず、無意識への防衛を全くしないで衝動性に身を任せすぎた。ユング心理学からみると心の健全さは、意識と無意識の統合によってなされるのである。意識と無意識両方のどちらもバランスよく発達させていく必要があるのである。

フロイトの説く「リビドー論」や「防衛機制論」、ユングの説く「個性化過程」、「集合的無意識」、「元型」という深層心理学概念に基づく臨床心理学の立場から、この両巨人の臨床例を考察することで、改めて意識と無意識のバランスの良い発達という心の「全体性」の回復という深層心理学の重要課題が認識できるのである。フロイトもユングも両人とも比重の違いはあるが意識と無意識のどちらをも軽視できないという立場をとる。一方を犠牲にすれば神経症、一方を犠牲にすれば重度の精神病になる事例がここで見られる。ここに、臨床家の学すべき心理療法の方向性や

目指すべき人間観の一端を見出すことができる。

### (註)

- 1) 河合準雄（1995）：ユング心理学と仏教 岩波書店 p. 59
- 2) Carl Gustav Jung (1933): Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewussten (訳) 野田 倬 (1982)：自我と無意識の関係 人文書院 p.85
- 3) Carl Gustav Jung (訳) 林道義 (1991)：個性化とマンガラ みすず書房 p.49
- 4) C. G. Jung recorted and edited by Aniela Jaffe (1963): MEMORIES, DREAMS, REFLECTIONS Random House. 河合準雄 (訳) (1972)：ユング自伝－思い出・夢・思想－II みすず書房 p.272
- 5) C・G・Jung 前掲書 2) p.92
- 6) 山之内靖 (1997)：マックス・ヴェーバー入門 岩波新書 p.28
- 7) Max Weber (1919): WISSENSCHFT ALS BERUF (訳) 尾高邦雄 (1936) 職業としての学問 岩波書店 p.41
- 8) Max Weber 前掲書 7) p.43-44
- 9) マックス・ヴェーバー：大塚久雄，生松敬三 (訳) (1972)：宗教社会学論選 p.5 みすず書房
- 10) Marianne Weber マリアンネ・ウェーバー (1926)：MAX WEBER Ein lebensbild (訳) 大久保和郎 (1965)：マックス・ウェーバー みすず書房 p.349
- 11) Max Weber (1905): DIE PROTESTANTISCHE ETHIK UND DER GEIST DES KAPITALISMUS. 大塚久雄 (訳) (1989) プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 岩波書店 pp.363-366
- 12) マックス・ヴェーバー，前掲書 9) p.9
- 13) M.Weber 前掲書 7) p.41
- 14) M.Weber 前掲書 7) p.56
- 15) M.Weber 前掲書 7) pp.56-57
- 16) Marianne Weber 前掲書 10) p.187
- 17) Marianne Weber 前掲書 10) p.189
- 18) Marianne Weber 前掲書 10) p.191
- 19) Sigmund Freud (1925)：懸田克躬 (訳) (1970) フロイト著作集 4 自己を語る 人文書院 p.46
- 20) Sigmnd Freud (1917)：懸田克躬・高橋義孝 (訳) (1971) フロイト著作集 1 精神分析入門 (正) 精神分析入門 (続) 人文書院 p.446
- 21) Carl Gustav Jung, (1916): Uber die Psychologie des Unbewussten, Zurich 高橋義孝 (訳) (1977)：カール・グスタフ・ユング 無意識の心理 人文書院 p. 192
- 22) C. G. Jung 前掲書 4) I p.269
- 23) 湯浅泰雄 (1979)：ユングとヨーロッパ精神 人文書院 p.31
- 24) Max Weber 前掲書 7) p.54
- 25) 三島憲一 (1987)：ニーチェ 岩波書店 p.174
- 26) 三島 前掲書 25) p.175
- 27) 林道義 (1981)：無意識の人間学 －ユング心理学の視

- 点から－ 紀伊国屋書店 p.38
- 28) 三島 前掲書 25) p.149
- 29) Friedrich Nietzsche: (訳) 原 佑 (1962) フリード  
リッヒ・ニーチェ ニーチェ全集 権力への意志 (上)  
理想社 p.307
- 30) Antony Stevens (1990): ON JUNG (訳) 佐山 堇子  
(1993): ユング ―その生涯と心理学― 新曜社 p.  
273
- 31) C. G. Jung recorted and edited by Aniela Jaffe  
(1963): MEMORIES, DREAMS, REFLECTIONS Ran-  
dom House. 河合準雄 (訳) (1972): ユング自伝－思い  
出・夢・思想－ I みすず書房 p.270
- 32) Carl Gustv Jung (1938): Psychology and Religion  
Yale University Press New Haven and London 村本  
詔司 (訳) (1989): 心理学と宗教 人文書院 p.84
- 33) Carl Gustav Jung (1944): Psychologie und Alchemie  
(訳) 池田紘一・鎌田道生 (1976): 心理学と錬金術 I  
p.126

## 要 旨

マックス・ウェーバーとフリードリッヒ・ニーチェは、社会学界、哲学界の大巨人であるが、彼らの学問論は、そのまま彼らの心理行動を反映している。ウェーバーは、過度に意識への信頼を置いて神経症になり、ニーチェは、無意識に魅せられて一体化しようとして精神病になった。これら両巨人の心理行動は、深層心理学で望まれる意識と無意識の統合とは異なって、意識、無意識どちらか一方にだけ偏ったものであった。全体性を生かない心理行動は、生を破たんさせる危険があることをこの二つの事例は表しているといえるだろう。ここから、深層心理学に基づく臨床心理学の目指すバランスの良い心の成長が重要な意義を持っていることが理解できる。